

序文

嘉治 佐保子・福原 正大

フィンテックのサービスは、銀行や証券会社などの金融機関が伝統的に行ってきた業務を、急速に代替しつつある。本特集では各国の中央銀行や監督官庁をも巻き込んでフィンテック研究を推進する動きが加速している動向に鑑み、フィンテックのマクロ的視点、先行する米国そして日本の最新事情、AI運用、オンラインオルタナティブファイナンスについて理論的・実証的視点も含めて紹介する。

第一章では、アジア開発銀行研究所所長である吉野直行・慶應義塾大学名誉教授と編者の一人である嘉治が、マクロの視点からフィンテックを論ずる。まず、日本のフィンテック関連投資が諸外国と比較して極端に低いことを指摘したうえで、「ふるさと投資ファンド」のような日本の新規事業への投資拡大の可能性を説明する。つぎに金融経済教育の必要性和その現状について、金融広報中央委員会のアンケート調査をもとに、都道府県別の特徴を明らかにしている。最後にフィンテックの各経済主体への影響を理論的に分析し、マクロ経済への影響には、フィンテックのプラス効果とマイナス効果があることを明らかにし、その波及経路を説明する。金融機関でない主体が金融仲介や決済・投資に参加することの、経済安定と安全保障に対する影響にも言及している。

第二章と第三章は、フィンテックの最新事情を、日本と米国について紹介する。第二章は、東海林正賢 KPMG ジャパンフィンテック・イノベーション部部長が執筆した。海外との比較も交えながら日本国内のフィンテック活用ケースを取り上げ、事業会社を含む多くの企業がフィンテックに取り組む背景を考察し、データを収集して顧客の動向を把握し顧客の嗜好に合

わせたサービスの提案に用いる、という企業のビジネス戦略を明らかにしている。そして金融機関がデジタル時代を勝ち抜く唯一の方法は、長年培ってきた強みを生かして顧客目線で業務を再構成することであると指摘する。

第三章「米国のフィンテック事情」では、ThirdStream Partners Managing Member のロス・ヒキダ氏と TableCheck の Head of Data Science であるジェイソン・ペリー氏が、フィンテック・イノベーションが家計の貯蓄・投資行動の諸問題をどう解決し家計の経済厚生を改善できるかという観点から、米国の最新事情を論じている。フィンテックがそれ以前のイノベーションと違うのは、消費者には金融情報とアプリへのアクセスを、企業にはアプリ開発等のコスト削減を、可能にしたことにある。非集権化（decentralisation）、仲介機関離れ（disintermediation）とオープンプロトコルによって大きく変わりつつある米国金融業界を、いくつかの例をあげて描写している。

続く第四章は、首都大学東京特任教授、京都大学客員教授およびお金のデザイン研究所所長の加藤康之氏が、AI およびフィンテックが資産運用をどのように変えるか論じる。AI やフィンテックが資産運用手法の開発に応用されている事例を幅広く紹介し、今回の AI/ フィンテックブームは一時的なものでなく資産運用ビジネスを大きく変えていると指摘する。テキストマイニングなどによって新たに得られたデータは、ディープラーニングをはじめとする機械学習によって高度な予測モデルが開発されている一方で、モデルのブラックボックス化という弊害をもたらしておりその対応が課題となっていると指摘する。AI による最適化技術やネット上のビッグデータからリスクファクターの推定

序文

という投資理論への貢献も試行され、ロボアドバイザーが投資未経験者層の資産運用普及に貢献しており、最近注目度の高いESG投資でもビッグデータの応用が進んでいることを明らかにしている。

最終章では慶應義塾大学および一橋大学の特任教授であり Institution for a Global Society CEO の福原正大氏が、オンライン・オルタナティブ・ファイナンスの概況を記述する。オンライン・オルタナティブ・ファイナンスは、データの拡充とテクノロジーの進展によりフィンアンシャル・インクルージョンを引き起こし、世界で急速に成長している。中心は中国であり、アメリカと英国など先進国においても新しいマーケットセグメントの掘り起こしと一部既存金融機関からの乗り換えを通じて、成長を続け

ている。貸付審査に利用される情報も、過去の負債履歴などの信用情報が利用されない場合さえあり、利用される場合もそれに加えて、企業においてはEC (Electronic Commerce, 電子商取引) サイトなどの情報、個人においては性格や学歴の詳細情報や引越し履歴などと拡大してきていると指摘する。こうしたオンライン・オルタナティブ・ファイナンスの現状、審査手法の実証分析サーベイ、そして具体的事例について概観している。

フィンテックは日進月歩の状態にあり、それをとりまく状況は刻一刻と変化しているが、この特集号がフィンテックのおおまかな全体像を示し、読者にさらなる学習を促すなら望外の喜びである。